

中興化成工業

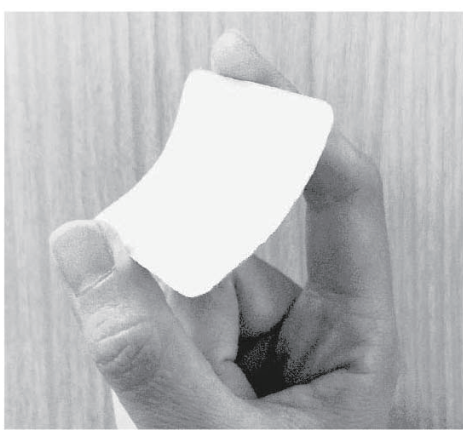
輻射放熱シートを開発

自動車部品向け 電動化見据え事業展開

23年に実用化目指す

ふっ素樹脂加工を手がける中興化成工業（庄野直之会長、東京都港区）は、電動車向けとしてアルミフィルムに放熱塗料をコーティングした「輻射放熱シート」＝写真＝を開発する。年内に量産技術を確立し、2023年に実用化を目指す。自動車の電動化や電装化に伴って放熱用シートなどの需要拡大が見込まれることから、これに対応する製品を開発して事業の拡大を図る。同社は現在、建築物用や食品搬送用ベルト、通信機器用基板向けのふっ素樹脂加工が主力で、自動車向け事業の規模は小さい。輻射放熱シート事業で自動車関連事業の売上比率を高める計画だ。

同社が放射用途の製品を手がけるのは今回が初めてとなる。開発する輻射放熱シート



は熱伝導率の高いアルミフィルムに、ふっ素樹脂を混入した塗料を塗布する。使用温度は最高150度で、シートの厚さは110μm。

塗料は外部から調達して、同社が塗布技術を提供する。塗料はふっ素を用いるため、加工温度が高く、取り扱いが難しい。同社では長年培ったふっ素関連のノウハウを生かし、アルミフィルムに均一に

塗布する技術を確立したという。軽量なことや、ふっ素が持つ耐候性などで他社製品との差別化を図る。

電動車などでは放熱対策が導入されているが「さらに放熱したい部分」（東京支店営業第1課の鳴澤友稀主任）や、スペースの狭い場所に装備する筐体など向けの需要を見込む。

松浦工場（長崎県松浦市）

で生産し、国内に加え、海外向けの輸出品も手がける方針だ。すでに試作品を自動車関連企業に提供しており、用途や需要など、市場調査を進めているという。

同社では、自動車向け事業としては電気自動車（EV）向けの高電圧配線識別用途のふっ素樹脂加工を施した粘着テープなどを展開している。

現在は5G（第5世代移動通信システム）の通信機器向け基板のふっ素樹脂加工などの需要が好調で、自動車向け事業の売上規模は小さい。また、ふっ素は「放熱よりも保温の特性を持つ」（同）ことから、放熱用途の製品はこれまで手がけてこなかった。電

動車シフトで需要が見込まれる輻射放熱シートを開発して、自動車関連事業を伸ば

し、経営のポートフォリオの拡充を図る。